

星の道、あるひは偽善者の道

—— 発行人愚言録 ⑧

今井博央希

悟りの型として概ね二つに分かれる。一つは視覚型。もう一つは聴覚型。

自分は視覚型の方なので、聴覚型の悟りについてはあまりわからない。本当に悟ってゐる人は、どちらもわかるのだらうけれど（笑）。

元じゅんころさんにしても松本自澄さんにしても「パンツ」を説く。「パンツ」これしかないといふ。

これはだういふことなのだらう。「パンツ」といふ音を追ふとそれだけで思ひに浸って悟りから離れる。中村天風さんは、チーンと鐘を鳴らして、どんどん音が小さくなって音が消えたとしじまの音を聴くこと、を言っていた。また「地の音」「天の音」を聴くとも言っていた。 「地の音」とは、外界の聴こえるすべての音。普通の音から微細な音まで。鳥の声から風の音まで。「天の音」とは声なき声のことを指す。音は聞こえてゐるけれど、その奥に絶対のしじまがある。音と同時に無音がある。世界は、音はするが静まり返ってゐる。

『カシミールの非二元ヨーガ』では、「聴くといふ技法」のところで「聴かれてゐるものを聴くことに戻しなさい」と書かれてゐる。「聴かれてゐる対象」と「聴いてゐる者」は「聴くこと」と「それ自体に収斂される。「パンツ」といふのは、対象としての音ではなく「聴くこと」それ自身を指しているのだと思ふ。元じゅんこ

ろさんや松本自澄さんが「パンツ」「パンツ」やっても、音のほうに注意を向けると誤りをおかすことになる。理解できないことになる。音でもなくそれを聴いてゐる自分でもなく「聴くこと」だけになったとき、彼らが言っていることがわかるのだ。心身脱落聴法底。

最近、「聴くこと」が来てゐるのかな。もう一つ「聴くこと」についての本の企画がある。

7月は、うまくいかないこと続きだった。次から次へとうまくいかない。またかまたかの連続だった。著者、編集者、関係者、調整もうまくいかず。かういふのは占星術や四柱推命でわかるものなのか。なにか運氣の低い波に入つたのか。生霊か（笑）。何が運氣を左右するのか。積極的思考が運氣を上げるといふが壁の連続だ。それに耐えることができるのか。ストレスが溜まる。イカレポンポンチキだ。感謝が足りないのかもしれない。神様だけでなく関係するすべての存在への感謝が足りない。感謝しても運氣がよくなるわけではなく、また運氣をよくするための感謝もインチキだ。ポンポンチキだ。

今回の第二特集でちょっと後悔することがある。「恐れから愛へ」ということで恐れと愛そ

れぞれの自律神経の状況を測定するために、戦争と殺人の映像を使ったことだ。それらの映像は、目的のための手段にはいけないと思つた。

仙道では不老不死を目指すのが、肉体は老死するので、不老不死とは肉体を超えたところにある。非二元的自己（真我）が、主客（物質世界）を超えてゐるがゆえに不老不死たるものだ。チベットのゾクチュエンも非二元的自己を体得し、肉体が死ぬときに「虹の体」になって昇天（アセンション）する。仙道でも尸解仙（死んでから消える）や、白日昇天（生きて昇天に消える）する。同じ原理なのか。仙道の修行では、非二元的自己を体得することはあまり聞かないが、本質的にはさうなのかもしれない。非二元的自己の体得と肉体の昇天とはどう関係があるのか。ゾクチュエンの修行体系？ としては、テクチューとトゥーゲルがある。テクチューは、空性をひたすら認識していくこと。禪のようなもの。トゥーゲルは、存在の様相を変化させていく修行。仙道みたいなもの。トゥーゲルによつて「虹の体」（ライトボディ）に変容していくといふ。テクチューで非二元的自己の体得し、トゥーゲルによつてアセンションする。もう少し研究してみたい（笑）。